

IT 技術者の育成を目的にした「混在研修」の可能性について

高谷 将宏¹, 庄子 栄光²

(受付：2023年8月4日 受理：2023年8月4日)

1 はじめに

(一社)宮城県情報サービス産業協会(仙台市)では、宮城県の委託により2018年から新卒者、未経験者向けIT技術者育成研修(以下、「混在研修」と称す)を実施している。新卒者は、卒業校(大学(含む短期大学)、専修学校、職業訓練校など)で情報を専門に学んだ者(以下、「情報系」と称す)と情報系を専門に学んでいない者(以下、「非情報系」と称す)に分けられ、情報系と非情報系が混在した状態での研修である。

高谷・庄子・梶(2022)は、混在研修の受講生アンケートをKJ法により質的に分析し、次の6点を効果仮説として見出した¹⁾。なお、混在研修の内容は参考文献[1]を参照のこと。

- ①自己の学びの深化
- ②質問が持つ効果の理解
- ③説明力の向上
- ④全体把握のし易さ
- ⑤チームの重要性の理解
- ⑥モチベーションの維持

これらの効果仮説を検証し、実際に効果として捉えられるのかについては、定量的かつ時系列的に確認する必要がある。そこで、本研究はこの効果仮説を検証し、混在研修の内容の充実を図ることを目的とする。なお、本研究は、時系列的検証の1年目にあたる。



Fig. 1 混在研修の様子(2023/6/12)

2 研究方法

2.1 アンケート調査

アンケート項目は、①情報系か非情報系か、②混在研修の効果についてどの様に感じるか(5件法)、③・④効果を感じた受講生、感じなかった受講生に対して、特にどういった内容についてそう感じたか(複数回答)、⑤その他自由記述として気が付いた内容の5項目からなる。なお、事前に予備調査を行い必要な修正を加え調査票を作成した。アンケートへの回答は主旨を説明した上で任意とし研修最終日実施した。結果、2023年の混在研修参加者20名全員から回答を得た。

2.2 分析方法

アンケートの結果は回答数が20であることから統計学的な分析では無く、度数分布表を作成し回答傾向の把握のみとした。

3 アンケート結果

3.1 情報系か非情報系の別

情報系8名、非情報系12名であった。

¹事業構想大学院大学

²一般社団法人宮城県情報サービス産業協会

3.2 混在研修の効果についてどの様に感じるか

この項目については、Table1 の通りであり、「どちらでもない」および「効果的ではない」との回答は0であった。

Table 1 混在研修の効果

| 項目 | 回答数 |
|----------------|-----|
| とても効果的である | 13 |
| どちらかという効果的である | 7 |
| どちらでもない | 0 |
| どちらかという効果的ではない | 0 |
| 全く効果的ではない | 0 |
| 合計 | 20 |

3.3 特に効果を感じた内容

複数回答であり、Table2 の通りであった。なお、効果を感じなかった受講生は0であった。

Table 2 効果を感じた内容（回答数の多い順）

| 効果仮説 | 回答数 |
|-----------------|-----|
| 自己の学び | 18 |
| チームで開発することの重要性 | 13 |
| 第三者への説明の仕方 | 9 |
| 開発実習における全体把握の仕方 | 8 |
| 質問の仕方 | 4 |
| モチベーションの維持 | 3 |
| その他 | 0 |

3.4 気になった点

自由記述にて気になった点として7回答を得た。効果仮説と異なる回答（要約したもの）を以下に記載する。

- ①「経験者に教えてもらうのはとても役に立ったが、経験者の方がわからない人へサポートする体制がうまくできていたらもっと教えあうことが活性化するのではないかと思った。」
- ②「できる人、できない人がいる中で、その中間に合わせて研修が進んでいくのですが、最もできない人へのフォローの場も必要なのかなと思いました。」
- ③「経験者のいるチームは経験者を頼りすぎる傾向があるため、全体として同じく成長を目指すのであれば経験者として他の方のスキルをより高めるよう指示する必要があると感じました。」

4 考察

情報系、非情報系の別なく「自己の学び」については効果があるとの回答が多い。また、「チームで開発することに重要性」についてもそれぞれの能力を活かし役割分担できている様子が伺える。一方、気になった点としての自由記述には、「できない人」へのフォローの場が必要であるとの回答が複数上がった。研修という限られた時間の中で、受講生の学び合いを体系的に展開するなど、さらなる研修運営の工夫の余地があるものと捉えている。2024年度以降の混在研修において有効な解決策を見出していきたい。

「第三者への説明の仕方」は、レビューや改正報告会、上長への作業報告を意味する。研修において何をしているのかを報告する、つまり、「開発実習における全体把握」を行い、自身の作業を降り取り可視化する必要がある。こうした内容においても効果を感じられている。

一方、「質問の仕方」、「モチベーションの維持」については”特に”とした上での効果は少なかった。本研修において、「質問の仕方」を身に付け、実務に合流した際に活かしてもらうことを意図しているのだが、この点は研修においてよりアプローチを強める必要を感じる。

5 まとめ

2023年度の受講生は全員混在研修に効果を感じていた。特に、「自己の学び」、「チームで開発することの重要性」については多くの受講生が効果を感じていた。一方、「できない人」、つまり理解の遅い受講生への対応については新たな課題として見出すことができた。

6 今後の課題

2022年度に効果仮説の構築、2023年度はその検証を行った。検証の繰り返しと結果の反映を繰り返すことで研修品質の向上を図り、受講生はもとより、所属企業、委託元の宮城県に還元していきたい。そのためには、このアンケートを数年実施し、定量的かつ時系列での効果を検証するとともに、情報系、非情報系の違いの有無をクロス集計などにより検証する必要がある。

7 謝辞

アンケートに協力いただいた受講生、担当講師の皆様へ

感謝いたします。

り入れた IT 技術者研修の効果についての仮説構築.
デジタル人材育成学会誌. 2022, 第 1 巻, 1 号, 11-
12

参考文献

- [1] 高谷将宏・庄子栄光・梶功夫. 学び合い的な場を取